

『源氏物語』における「がまし」形容詞の表現性

——「わざとがまし」に着目して——

本 廣 陽 子

一、はじめに

二、『源氏物語』における「がまし」形容詞の発展

三、描写の「がまし」形容詞―「わざとがまし」

四、「がまし」形容詞と心情的要素

五、おわりに

『源氏物語』の「がまし」形容詞は、そこに心情的要素を含みこむ。それは、「をこがまし」のような人物に対する批判を表す語のみならず、「わざとがまし」のような状況を描写する語についても同様である。そして、「わざとがまし」が示す、客観的事態の主観的把握の表現こそ、特に『源氏物語』において生み出された新しい表現方法であったと言える。

なお、本稿は、拙稿「『源氏物語』における「がまし」形容詞の発展」(『国語国文』第八四巻第五号 二〇一五年五月)を踏まえ、それをさらに発展させたものである。

一、はじめに

接尾語「がまし」を持つ形容詞（以下、「がまし」形容詞）は、『源氏物語』において、それ以前に比べてはるかに多く用いられており、『源氏物語』で初めて登場する語も多く、『源氏物語』に特徴的な語として位置づけられる形容詞である。

筆者は、前稿『源氏物語』における「がまし」形容詞の発展^①において、「がまし」形容詞が『源氏物語』の中でどのように用いられていたのかを考察し、『源氏物語』に特有の二つの「がまし」形容詞の用法があることを指摘した。一つは、他者から自己へ、さらには自己から自己へ向けられた批判を表す「がまし」形容詞で、その「がまし」形容詞からは、危惧、自嘲や後悔など様々な感情が感じられるというものの、もう一つは、描写の「がまし」形容詞で、作中人物からの批判として用いられるものではなく、主に地の文で用いられ、その場の状況を印象的に描き出すことを目的に用いられたと考えられるものである。

前稿では、描写の「がまし」形容詞については、その存在を指摘するにとどまっていたが、描写の「がまし」形容詞も、批判の「がまし」形容詞同様、それぞれの文脈で担う意味合いがあるのではないか。

そこで、『源氏物語』において、描写の「がまし」形容詞が用いられることによって、そこに、どのようなニュアンスがもたらされ、またどのような効果が与えられているのか、その表現性について考察するとともに、なぜ、そのような意味合いが「がまし」形容詞から読み取れるのかを考察し、『源氏物語』において、「がまし」形容詞の用法が大きく花開いていった様を、前稿より一歩進めて明らかにしてみたい。

まず、前稿で筆者が明らかにした『源氏物語』の「がまし」形容詞の独自性を確認しておきたい。^②

二、『源氏物語』における「がまし」形容詞の発展

「がまし」形容詞は、『源氏物語』以前には、わずかに、『大和物語』『落窪物語』『枕草子』『和泉式部日記』の四作品にしか用例が見られない。さらに、『大和物語』に見られる唯一の例「ことがまし」は、附載説話にのみ見られる例で成立に問題があることを考えると、実質、『源氏物語』以前に「がまし」形容詞が見られるのは、『落窪物語』『枕草子』『和泉式部日記』の三作品だけである。また、それら三作品についても、『落窪物語』が四語六例、『枕草子』は三語三例、『和泉式部日記』は一語一例見られるのみで、決して多くはない。このように、ごく限られた作品

に数例存在するのみの「がまし」形容詞は、しかし『源氏物語』においては十六語九十例見られ、異なり語数、用例数ともに、はるかに多く用いられる。それに加えて、異なり語数十六語のうち、十一語もが『源氏物語』以前に用例を見出せない語なのである。

『源氏物語』以前にわずかな例しか見られない「がまし」形容詞がこれほどまでに多く『源氏物語』で用いられているということ、また、『源氏物語』以前に用例を見つかることのできない新しい「がまし」形容詞が多く見られるということを見ると、そこに、『源氏物語』作者の意図を感じざるを得ない。そこで、「がまし」形容詞が初めて見られる『落窪物語』の用例を出発点に、『源氏物語』において、「がまし」形容詞がどのように用いられているのか、その用法の展開を考察した。

はじめに、『落窪物語』の例を確認しよう。

①「まづ外の物をしたまひて、ここのをおろかに思ひたまへる。もはら、かくておはするに、かひなし。あなしらじらの世や」とうちむつかりて行く後手、子多く生みたるに落ちて、わづかに十すぢばかりにて、居丈なり。へうちふくれて、いとをこがまし」と、少将つくづくとかいばみ臥したり。(『落窪』巻一・八四／傍線、筆者。以下同じ。)^③

姫君に対してつらくあたる北の方を目の当たりにした道頼は、髪が薄く短く、また太った北の方の姿を「をこがまし」、滑稽で愚かだと批判する。『落窪物語』に出てくる「がまし」形容詞は、このように、いずれも積極的で直接的な批判、非難を表す。そして、それは皆、作中人物が他者を批判、非難する時に使われている。つまり、他者に対する強い批判・非難が、「がまし」形容詞の初期の用法であると言える。

『落窪物語』で見られた批判の「がまし」形容詞は、『源氏物語』においても引き継がれる。しかし、『源氏物語』の「がまし」形容詞はこれだけにはとどまらない。

『源氏物語』の批判の「がまし」形容詞は、『落窪物語』には見られない特徴を持っている。それは表現主体が作中人物でも、その批判が他者へ向かうのではなく、自己に向かう例が見られることである。

②君、いかにせまし、聞こえありて、すぎがましきやうなるべきこと、人のほどこだにものを思ひ知り、女の心かはしけることと、推しはかられぬべくは世の常なり、父宮の尋ね出でたまへらむも、はしたうすずるなるべきを、と思し乱るれど、(『若紫』一―二五二)^④

③かくほどもなき物の隔てばかりを障りどころにて、おほつかなく思ひつつ過ぐす心おそさの、あまりをこが

ましくもあるかなと思いつづけられるけど、つれなくて、おほかたの世の中のことども、あはれにもをかしくも、さまざま聞きどころ多く語らひきこえたまふ。(『総角』五—二三三)

用例②は他者から自己へ向けられた批判を表す「がまし」形容詞の例、用例③は自ら自己を批判する例である。

用例②において、「すぎがまし」と批判する主体は世間であるが、その批判の矛先は自己(源氏自身)に向かっている。このように、『源氏物語』では、他者の目を想定し、他者から自己に向けられた批判を、自己の立場から表現するという用例が見られるようになる。そして、これらの「がまし」形容詞は、しばしば推量表現を伴って用いられ、そこに作中人物の危惧の念が感じられるような用いられ方をするのである。

用例③においては、薫が自分自身を批判する言葉として「をこがまし」が用いられている。他者の目を想定するのではなく、自分で自分を省みて批判し、それによってそこに自嘲や後悔を感じさせる、自己批判の用法が見られる。

このように、批判を表す「がまし」形容詞は、『落窪物語』に見られる強い他者への批判にはじまり、『源氏物語』においては、危惧の念や自嘲、後悔を伴う自己への批判の語として積極的に用いられたということができるのである。

このような批判を表す「がまし」形容詞が存在する一方で、『源氏物語』には、それに分類できない「がまし」形容詞も存在する。「わざとがまし」や「かごとがまし」などで、これらは『源氏物語』において初めて登場する「がまし」形容詞である。筆者は前稿でそれらを描写の「がまし」形容詞と名付けた。

④秋待ちつけて、世の中少し涼しくなりては御心地もいささかさはぐやうなれど、なほともすればかごとがまし。(『御法』四—五〇三)

用例④の「かごとがまし」は、語り手による紫上の病状に対する批判を表しているのではなく、愚痴っぽくなるその紫上の病状を説明している語だと考えられる。つまり、ここの「がまし」形容詞は、事態や状況を描写するために用いられたものだったのである。

このような「がまし」形容詞は、元来批判を表す「がまし」形容詞を、別の形で転用し、状況を描写するのに特化し、その場の状況を印象的に描き出すことを目的に用いられた用法だと考えられる。そして、それらの語がいずれも『源氏物語』で初めて見られる語であることを考える時、新しい「がまし」形容詞を用いて事態や状況を描写するという方法は、まさに、『源氏物語』作者によって、新しく生み出され試みられた「がまし」形容詞の用法だったと考

えられよう。

三、描写の「がまし」形容詞―「わざとがまし」

前稿において、筆者は、描写の「がまし」形容詞はその場の状況を印象的に描き出すことを目的に用いられたと考察したが、その後、この描写の「がまし」形容詞がそれぞれの文脈で担った意味合いは、はたしてそれだけであったのだろうかという疑問を持った。とりわけ、『源氏物語』において、十例という、「をこがまし」に次いで多く例が見られる「わざとがまし」は、単に「ことさら格別に、ことさらに立派に」という状況を描写したと理解しただけでは、十分に解釈したとはいえないように思われる例がいくつも見られる。

また、「わざとがまし」であれば、代わりに「わざと」を用いたとしても、とりわけそのようにしたさま、格別であるさまや、本格的であるさまを表すことができる。それなのにあえて「わざとがまし」が用いられたということは、そこには、やはり何かしら別のニュアンスを加えたかっただけに違いない。

「わざとがまし」は、その状況を描写するために用いられた語ではあるが、そこには、それらの語を使っただけからこそ生まれる意味合いやニュアンスがあると考えられるので

はないか。

本章では、特に「わざとがまし」を取り上げ、『源氏物語』における描写の「がまし」形容詞がもたらすニュアンスと、それらの語を用いた時に生まれる効果を考えていきたい。

まず、次の例を見てみたい。前稿で描写を表す「がまし」形容詞として引いた例である。これは、「梅枝」巻で、螢兵部卿宮が源氏に仮名の手本を贈った返礼に、源氏が漢籍を贈る時の様子について述べたものである。

⑤「女子などを持てはべらましにだに、をさをさ見はやすまじきには伝ふまじきを、まして朽ちぬべきを」など聞こえて奉れたまふ。侍従に、唐の本などのいとわざとがましき、沈の箱に入れて、いみじき高麗笛添へて奉れたまふ。（『梅枝』三―四二二）

前稿では、この例について「いかに立派なものであったか」を「わざとがまし」で表していると記した。この意味で解釈するならば、ここでの「わざとがまし」は、「わざと」とさほど意味は変わらないように思われる。

前述のように、「わざと」という言葉そのものが、とりわけそのようにしたさま、格別であるさまや、本格的であるさまの意を持つ。

例えば、次の「絵合」の巻の二例を見てみたい。一つ目

は、権中納言が絵をことさら素晴らしく描かせたことが「わざと」で表現され、二つ目は、光源氏が熱心に絵を集めたことが同じく「わざと」で表現されている。

・「物語絵こそ心ばへ見えて見どころあるものなれ」とて、おもしろく心ばへあるかぎりを選びつつ描かせたまふ。例の月次の絵も、見馴れぬさまに、言の葉を書きつけて御覽ぜさせたまふ。わざとをかしうしたれば、またこなたにてもこれを御覧するに、「絵合」二―三七六―三七七)

・同じくは、御覽じどころもまさりぬべくて奉らむの御心つきて、いとわざと集めまゐらせたまへり。こなたかなたとさまざまに多かり。「絵合」二―三七九)ともに絵を好む冷泉帝のため、格別に絵を描かせたり集めたりしているさまが、「わざと」で表されているのである。なお、『源氏物語』において、「わざと」は打消の語とともに用いられることも多い。

・みな御酔ひになりて、暮れかかるほどに楽所の人召す。わざとの大衆にはあらず、なまめかしきほどに、殿上の童べ舞仕うまつる。朱雀院の紅葉の賀、例の古事思し出でらる。「藤裏葉」三―四六〇)

・わざともなく掻きなしたまひたるすが掻きのほど、いひ知らずおもしろく聞こゆ。「常夏」三―二二二)

「藤裏葉」巻の「わざと」は、舞樂の大きかりで盛大な様を、「常夏」巻の「わざと」は光源氏がことさらに和琴をかきならす風情を表す語だが、ただし、ここでは、ともに打消で用いられることで、「わざと」は行わないことの素晴らしさが描かれる。『源氏物語』の中では、仰々しくもないもの、事そいだ風情にしばしば価値が見出される。「わざと」つまり「ことさらに、格別に」行われれば、素晴らしいのは当然なのであるが、これらの場合はそうしないことで表される優美な世界を表現している。

これらの例から分かるように、「わざと」は、何か特別に事を行う時、行事やその準備、贈答の場面で使用される時は、そこで当然求められるべき格別さ、盛大さを表現する語として用いられるのである。

そういう意味では、用例⑤の「わざとがまし」は、「わざと」と、意味も使われている状況もさほど違いはないように見受けられる。つまり、ここでの「わざとがまし」は、「わざと」と同等的か、「わざと」を単に強調した程度の意味にしか捉えられないように思われる。

しかし、他の例を見ていくと、むしろこのような単純な意味での用いられ方が例外的に感じられるほど、その他の「わざとがまし」は何かしらのニュアンスを伴って読むことができるのである。

用例⑤と同じ、贈り物をする時に用いられる「わざとがまし」の例を、これから見ていきたい。

⑥院はいと口惜しく思しめせど、人わろければ御消息など絶えにたるを、その日になりて、えならぬ御よそひども、御櫛の箱、うちみだりの箱、香壺の箱ども世の常ならず、くさぐさの御薫物ども薫衣香またなきさまに、百歩の外を多く過ぎ匂ふまで、心ことにととのへさせたまへり。大臣見たまひもせむにと、かねてよりや思し設けけむ、いとわざとがましかめり。(「絵合」

二一三六九(三七〇)

⑥は、前齋宮に思いを寄せてきた朱雀院が、前齋宮が冷泉帝に入内することを知り、入内当日になって、「わざとがましき」までの贈り物をすることを述べた部分である。朱雀院の贈り物がとりわけ盛大であったことが、語り手の言葉によって説明されている。

朱雀院は前齋宮にずっと心を寄せていた。それにもかかわらず、光源氏と藤壺の思惑によって、前齋宮は冷泉帝に入内することになったのである。それを聞いた朱雀院は送っていた文を一切送らなくなったが、当日になって「わざとがまし」いまでの贈り物をする。その理由は「大臣見たまひもせむ」つまり、光源氏が見ているからである。

玉上琢彌氏は『源氏物語評釈』において、この部分を次のように説明する。

「大臣見たまひもせむに」とかねてより考え、用意なさっていたらしく、わざとらしい感じになるまでの豪華な贈物であった。源氏に対し、せいっぱい、前齋宮に対するわが心を見せようとの、院の、張り合うお心が感じられる。院は、前齋宮に対する愛執を、この豪華な贈物を「心ことととのへさせたま」うことによつて強く示されると同時に、源氏に対する抗議をもこめられたのだ。⁽⁶⁾

この贈り物は、前齋宮に対する朱雀院の強い想いを表すと同時に、源氏に対する抗議の意味をも込められている。朱雀院がとりわけ盛大にして自分を誇示せざるを得なかったその贈り物の様子が、この「わざとがまし」には表されていると考えられるのである。

単に盛大であることを表そうとするならば、「わざと」を使えばよいであろう。しかし、ここで表現したかったのは、盛大であるというだけではない。源氏の手前、とりわけ盛大にして自分を誇示せざるを得ないという朱雀院の心情が語り手の言葉を通してこの「わざとがまし」に表されている。

もう一例、見てみよう。

⑦伊予介、神無月の朔日ごろに下る。「女房の下らんに」とて、手向け心ことにせさせたまふ。また内々にもわざとしたまひて、こまやかにをかしきさまなる櫛、扇多くして、幣などわざとがましくて、かの小桂も遣はす。（「夕顔」一一一九四／波線、筆者。以下同じ。）

⑦は、空蟬が、夫と共に伊予へ下向することになり、空蟬に餞別の贈り物をすることを描写した部分である。

表向きは、「女房の下らんに」、つまり、空蟬とその女房たちにということで、光源氏は餞別を贈るが、その中に「内々に」として、空蟬あての餞別も準備する。この餞別には「かの小桂も遣はす」とあるように、小桂がそえられていた。「かの小桂」は、かつて、光源氏が空蟬のもとに忍び込んだ時、逃げ出した空蟬の後に残された衣を指している。光源氏は自宅に持って帰っていたその小桂を餞別とともに空蟬のもとに返す。そして、光源氏の空蟬に対する恋は終わりを迎えるのである。

空蟬は光源氏の思いには応えることなく、伊予介と共に生きる人生を選ぶ。光源氏は、結局、空蟬を自分になびかせることができなかった。

この場合、「わざと」と「わざとがまし」が重ねて使われている。まず、「わざと」を用いて全体として餞別の品を格別にととのえることを示し、さらに、特に幣に関して

「わざとがまし」を用い、ことさらに準備したことが示される。

櫛や扇のみならず、幣までも、ことさらに、さらに言えば、必要以上に格別に趣向を凝らして贈るその背景には、結局空蟬を自分になびかせることができなかった源氏の苦々しさがあるのではないか。

自分になびかず、夫とともに伊予へ下向していく空蟬に対する、光源氏の苦々しさが、「わざとがまし」で描写された、必要以上の趣向を凝らした贈り物になって表れていると考えられる。

用例⑥においても用例⑦においても、贈り物をした当事者、即ち朱雀院や源氏にとつては、決して晴れがましい事態ではない。むしろ、苦々しい事態である。喜んで「わざと」、つまりとりわけ盛大に行うのではなく、あえて、またはそうせざるをえなくて盛大に行う、それが「わざとがまし」で表現されているのではないかと思われるのである。このように「わざとがまし」を考察してみると、次の例のような、一見「わざと」とほとんど意味の変わらないような「わざとがまし」であつても、そこに、作中人物の心情を読み取ることができるのではないだろうか。

⑧姫君の御方に渡りたまへれば、童、下仕など御前の山の小松ひき遊ぶ。若き人々の心地ども、おき所なく見

ゆ。北の殿よりわざとがましくし集めたる鬚籠ども、破子など奉れたまへり。「初音」三一―四五

明石の君は、かつて大堰の山荘に住んでいた頃、娘の明石の姫君を、将来のために紫の上に預けた。その後、明石の君は、六条院に移ってからもお、同じ屋敷にしながら、娘と会うことができないのである。

実母とは言え、娘と会うことも叶わない、その明石の君が、新年に贈った贈り物の描写に「わざとがまし」が用いられる。そのあまりに格別な、趣向を凝らした贈り物には、我が子に会うことも出来ない明石の君が、盛大な贈り物でしか母の愛情を伝えることができない、その切なさが込められているのではないだろうか。

このように見てくると、「わざとがまし」は、いずれも単に格別である、盛大であるという意味にとどまらず、「わざと」な贈り物をせざるを得なかった登場人物たちの心情を感じさせるのである。

そしてそれらは、「わざと」で示されたならば描かれたであろう、明るい盛大さ、晴れやかさには収まらない、否定的な感情、もつと言えば陰の感情とも言おうか、そういうものを読者に感じさせる効果があると思われるのである。^⑨

「わざとがまし」が贈り物の場面以外で用いられた例を見ておきたい。

⑨なほ、世にある人のありさまを、おほかたなるやうにて聞きあつめ、耳とどめたまふ癖のつきたまへるを、さうざうしき宵居などに、はかなきついでに、さる人こそとばかり聞こえ出でたりしに、かくわざとがましうのたまひわたれば、なまわづらはしく、女君の御ありさまも、世づかはしくよしめきなどもあらぬを、

〔未摘花〕一一―二七八

大輔命婦から未摘花の噂を聞き、未摘花に興味を持った光源氏だったが、その後、頭中将とどちらが先に手に入るか競い合うようになり、光源氏は執拗に未摘花に言い寄る。⑨では、思いのほか熱心になってしまった光源氏に困惑している命婦の立場に立ち、命婦の心情に即しながら、語り手が語っていく。

命婦は源氏に未摘花に興味をもたせるべく、話をもちかけた張本人である。だから、源氏が未摘花に興味を持つことについては歓迎してもよいはずである。しかし、一方で、命婦は未摘花が光源氏の期待に応えられるような姫君ではないことを知っている。あまりに源氏が熱心になった結果、その期待が裏切られることを命婦は危惧しているのである。「わざとがまし」で評された源氏の行為は、命婦の「なま

わづらはし」という否定的な感情へ結びついていく。

命婦にとって、源氏のとりわけ熱心な口説きは、手放しで歓迎できるものではなかったようである。そこまでしなくともいいのに、という命婦の心情が「わざとがまし」という表現に反映されているのではないかと考えられるのである。

次の例も見ておきたい。

⑩上にも宮にも、さぶらふ女房の中にも容貌よくてあてやかにめやすきは、みな移し渡させたまひつつ、院の内を心につけて、住みよくありよく思ふべくとのみ、わざとがましき御あつかひぐさに思されたまへり。

〔勾宮〕五―二二

冷泉院、秋好中宮が薫を寵愛し、その厚遇ぶりが「わざとがまし」で表現されている。この直後には、「などかさしも、と見るまでになん」という語り手の言葉が記され、冷泉院の寵愛ぶりが度を超していたことを表している。

「わざとがましき御あつかひぐさ」と思っていたのは冷泉院であるから、「わざとがまし」は冷泉院のことさら格別^{（きやくべつ）}に扱いたい気持ちを表していたとひとまずは取れる。しかし、「わざとがまし」が地の文で表現されていることを考えると、「わざとの御あつかひぐさ」ではなく、「わざとがましき御あつかひぐさ」と表現した背景には、異常なまで

の寵愛、度をすぎた関わり合いと捉える語り手の意識が反映した表現と捉えることもできるのではないだろうか。

ここまで「わざとがまし」の用例を見てきた。「わざとがまし」は、状況を説明する語ではある。しかし、「わざとがまし」で表された様子は、単に状況を描写するのみならず、登場人物や語り手の心情をそこに反映させていると言えるのではないだろうか。そしてそれらの感情は、総じて、否定的なもの、陰のある心情である。「わざと」が持つ肯定的なニュアンスからはみ出る、あえてそうせざるを得ない抗議や苦々しさ、切なさ、そこまでしなくてもという苦みのある感情などが、「がまし」形容詞を用いることによって、そこに醸し出されてくると考えられるのである。

四、「がまし」形容詞と心情的要素

これまで、『源氏物語』の文脈に即して「がまし」形容詞を解釈し、そこに、心情的要素が表されていることを指摘してきた。第二章において、『源氏物語』に見られる自己に向けられた批判の「がまし」形容詞には、危惧や自嘲、後悔などの心情が読み取れることを前稿を振り返って説明し、第三章では、描写の「がまし」形容詞である「わざとがまし」からも、そこに否定的な心情が読み取れることを明らかにした。

『落窪物語』に見られた初期の「がまし」形容詞は、他者に対しての積極的な批判を表していたが、そもそも、これも、「がまし」形容詞を用いることによつて、そこに「積極的な批判」という心情的要素が付け加えられたものだと解釈できる。『源氏物語』においては、さらに発展して、「がまし」形容詞が単純な批判ではなく、様々な心情的要素を表現するようになるのである。

ここで、もう一つ重要な問題が残っている。「がまし」形容詞を用いると、なぜそのような心情的要素を付加するような表現が可能になるのか、という問題である。言い換えれば、接尾語「がまし」が付くと、どうして様々な心情を内包するようになるのか、ということである。

このことを明らかにするためには、接尾語「がまし」について考えなければならない。本章では、接尾語「がまし」の作用について、一つの可能性を考えたい。

接尾語「がまし」の意味については、これまでの研究で様々に言及されている。

はじめに、『角川古語辞典』、『日本国語大事典』、『岩波古語辞典』の三つの辞書を確認しよう。

『角川古語大辞典』項目「がまし」

名詞・副詞、また動詞連用形に接して、ひとかど…の

様子を呈する、…らしくみえる、…の風がある、…の傾向がある、などの意の形容詞をつくる。

『日本国語大辞典(第二版)』項目「がましい」

動詞の連用形、体言、副詞などに付いて、その状態や物に似ている意を表わす。…らしい。…のきらいがある。…の傾向がある。

〔語誌〕

(2) 中世以降、「望ましくない。不快である」といった否定的な評価の意味を示す方向へ傾いてゆくが、中古には「はれがまし」「ひとがまし」のように、肯定的な意味を表わす語もあり、否定的な評価の意味に偏っているものではなかった。

『岩波古語辞典』項目「がまし」

《カマシ(囂)の転用。名詞・動詞連用形・副詞などについてシク活用の形容詞をつくる》…すぎてうるさい感じだ。…のきらいがある。「さるがう・し」「すき・し」「をこ・し」など。

▽みな良い意味には使わない。

先行研究においても、これらの辞書のどれかに解釈は一致する。

例えば、石川徹氏は、『角川古語辞典』、『日本国語大辞

典』の意味と同様に、「……に似る」「……らしく見える」の義と解する。^⑧

村田菜穂子氏は、接尾語「がまし」と「がまし」を比較し、辞書において、「ゝガハシには「批難、嫌悪の気持を含む」。「非難がましく言う」というような記述がなされているのに対し、ゝガマシにはそのような意味的に、望ましくないや劣る（以下「否定的な（評価の）意味」と呼ぶ）と言った記述がない。」と述べ、ゝガマシをとる形容詞が「わざとがまし」「はれがまし」「ひとがまし」のように、否定的な意味を示さない場合があることを指摘して、次のように結論づける。

以上のように、接尾辞ゝガマシは元来、ゝのきらいがある、ことさらゝの状態にあるというような、前項成素の状態に傾いていることを表すもので、平安時代において、必ずしも評価的に否定的な意味を表すに偏っていたものではなかったと考えられる。^⑨

村田氏の解釈は『日本国語大辞典』に近いものであると言える。

また、勝田耕起氏は、『岩波古語辞典』の説を支持し、「がまし」を「あるモノや人の様子が、ゝを想起させる要素を過度に感じさせるさま」とする。^⑩

岡本美和子氏は、以上の三人とは異なり、「がまし」形

容詞の意味のみならず、その語を用いることによって生まれる表現効果について考察する。岡本氏は、意味については、石川徹氏の説を支持し、「接尾語「がまし」は、「……らしく見える」という他者の目を添える語である」とした上で、「上接語のもつ優美とは言えない危うさを和らげ、相手との間に生まれる心の負担を軽減するのが、接尾語「がまし」の表現効果である」と結論づける。^⑪

このように、「がまし」はこれまで様々な解釈されてきた。逆に言えば、様々な解釈を許す語でもあるということである。

そこで、本稿では、「がまし」形容詞がもたらすニュアンスを考察するにあたり、「がまし」形容詞に、「盗人がまし」「猿樂がまし」「かごとがまし」のような語が存在することに着目したい。

⑩ 「あやしくあひ思ひたてまつりたる童なめり。盗人がましき童にて、くやつが、へよくなさむ」とて、したるにこそあめれ。……（『落窪』巻一・一〇六）

⑪ いささかもの言ふをも制す、なめげなりとても咎む、かしがましうののしりをる顔どもも、夜に入りては、なかなか、いますこし掲焉なる火影に、猿樂がましく

わびしげに人わろげなるなど、さまさまに、げにいなべてならず、さま異なるわざなりけり。〔少女〕三

―二五―

⑫昔物語に、親王の住みたまひけるありさまなど語らせたまふに、繕はれたる水の音なひかごとがましう聞こゆ。〔松風〕二―四一三

⑩の『落窪物語』の例においては、落窪の君の栄華のためにあこぎが男を手引きしたと北の方は思い、北の方はあこぎのことを「盗人がましき童」と評する。この場合、あこぎは「盗人」ではなく、あこぎを「盗人」にたとえている。

用例⑪では、夕霧の字を付ける儀式に参列している学者たちの様子を「猿楽がまし」と言つて、居並ぶ博士たちの様子を「猿楽」にたとえており、用例⑫では、水の流れる音を「かごとがまし」として、水の音を「かごと」にたとえている。

このような「がまし」形容詞が見られるということは、「がまし」形容詞は一種の比喩表現であると言える。そうだとすると、「をこがまし」「しれがまし」も、さらに言えば「わざとがまし」も本質的には同じで、「をこ」「しれ」「わざと」に準ずるものとしての表現するのが「がまし」形容詞であると言える。⁽¹²⁾

このことは『角川古語辞典』や『日本国語大辞典』が示した、「ひとかど…の様子を呈する、…らしくみえる、…の風がある、…の傾向がある」、「…らしい。…のきらいがある。…の傾向がある」と矛盾しない。

ただし、比喩表現だからといって、岡本美和子氏の主張するように「がまし」形容詞を婉曲表現だと捉えるのは『源氏物語』の「がまし」形容詞の用い方にそぐわないように思われる。なぜなら、初期の「がまし」形容詞の例である『落窪物語』の例が、「がまし」の上接語を強調するような意味で用いられていることや、「わざとがまし」が、そうまでしなくてもいいのにあえて「わざと」と言うたような、「わざと」を強めるような意味が見られるからである。とはいえ、勝田氏の言うように、「がまし」形容詞を上接語を強調したものと単純化して捉えるのは、『落窪物語』の例においては問題ないが、『源氏物語』の例を考えると十分ではないと言えるだろう。

接尾語「がまし」は、強調か、婉曲かなどというようなもので捉えるのはふさわしくない。「がまし」を付けて比喩表現にすることによって、そこに心情的要素が含まれる表現方法になっていると考える方がよいのではないか。

比喩表現が心情的要素を含む、という可能性の一例として、現代語における比況の助動詞「みたいだ」を考えたい。

参考までに『日本国語大辞典』（第二版）項目「みたいだ」には、次のように三つの意味が挙げられている。

①性質や状態が他の何かと似ていることを表わす。

②例示して強調する意を表わす。

③不確かなまま遠まわしに断定する意を表わす。：ようだ。

「みたいだ」は、「まるで雪が降ったみたいだ」のように、類似するものを挙げて表現するが、このような直喩の意味以外にも、「君みたいに一生懸命な人はいない」のように、例示して強調の意を表すこともあれば、「外は雨が降っているみたいだ」のように、婉曲的に用いることもある。これらの三つは前掲の『日本国語大辞典』の意味に対応する。

さらに、「みたいだ」という語は、愚かな行為をした自分を「ばかみたいだ」と言うこともできれば、相手の愚かな行為を「ばかみたい！」となるじることでもある。この場合、「ばか」の直喩表現や、「ばか」を強調している、または婉曲表現であると説明したのでは正確ではない。

自分を「ばかみたいだ」と言う時、また相手に「ばかみたい！」と言う時には、「おれはばかだ」と言った時や、「あなたはばかだ」と言った時にはないニュアンスが現れる。自分自身を「ばかみたいだ」と言う時には、自分の愚

かしきをしみじみとなげく気持ちだが、他人に対して「ばかみたい！」と言った時には相手を強く非難する気持ちだが、つまりは、発話者の心情が、「ばか」を単独で用いた時よりも強く表されると考えられるのである。単に「ばかだ」と言った時、それは客観的な側面が強いが、「みたい」を付けた時は、客観的表現から主観的表現へ、変化していると感じられるのである。

内田賢徳氏は、「ようだ」「みたいだ」の転用について⁽¹³⁾において、「どうもかぜをひいたみたいだ」と「まるでかぜをひいたみたいだ」の二つの例を挙げ、前者は後者の転用であることを確認した上で、その転用の過程を次のように説明する。

直喩の関係決定に働く用言的な「ようだ」「みたいだ」は、その関係の内容、即ち、二つの物事の間を同姓性というところに定位することの内容的な側面と、それらに関係づけるという作用性において捉えられる。助動詞への転用に当たっては、その用言的な作用性は捨象され、(何故なら、既にその従う述語にその用言性は果たされているから)同姓性ということに発するこれらの語のもつ叙法的な側面(それら「さ」としての)を発揮する語となる。それは、或る物事を推量的に述べるということの、しかも婉曲的なそれとしての発揮である。

直喩表現としての「みたいだ」から、用言的作用が失われ、叙法的な側面が発揮されると、推量的な婉曲表現になるという。叙法的な側面が現れるということは、発話者の事態に対する把握の仕方が現れるということではないのか。「みたいだ」に現れた叙法的側面は、発話者の主観的把握の現れと考えられないだろうか。

「みたいだ」に見られる、比喩表現でありながら心情的要素を含む、言い換えれば主観的表現であるという構図と同様のものが、「がまし」形容詞にも見られるのではないかと考えられる。

ここで、「をこがまし」の次の用例を見てみたい。『源氏物語』において、「をこなり」と「をこがまし」の両方が用いられている例である。

⑬ いぎたなきさまなどぞあやしく変りて、やうやう見あらはしたまひて、あさましく心やましけれど、人違へとたどりて見えんもをこがまし、あやしと思ふべし、本意の人を尋ねよらむも、かばかり逃るる心あめれば、かひなうをこにこそ思はめと思す。(『空蟬』一一一二)

五)

光源氏は空蟬のもとに忍び込むが、空蟬はそれを察知して軒端萩を残して逃げ出す。光源氏が、そこにいるのが空蟬

ではないことに気付いたのが、この場面である。自分の勘違いを空蟬に感づかれるのも、そういう自分が「をこがまし」、また、軒端萩も不審に思うだろう、これから空蟬を探し出したとしても、本人に逃れる心があるなら、甲斐もなく、空蟬も自分のことを「をこに」思うだろう、と光源氏は考える。

我が身についての批判は「をこがまし」で記し、空蟬の自分に対する判断を「をこなり」で記す。この部分は光源氏の心中表現である。光源氏にとって、空蟬の自分に対する評価については疑いようもなく感じられ、より客観的な「をこなり」を使う一方で、自分自身については「をこがまし」と、これは苦々しさを伴う、心情的要素を感じさせる「がまし」形容詞を用いるのである。

「をこなり」と言った時、それは客観的な性質を言い当てたに過ぎないが、「をこがまし」と「がまし」が付き、一種比喩表現によつて形容詞化されると、そこに心情的要素が加わってくるからである。そもそも、形容詞化するということが、主観的判断を表す語になったということでもある。

「をこがまし」について、石川徹氏は「気持の言葉である」^⑭と述べたが、「がまし」形容詞は、心情的要素を多分に含む語であつたということができるのである。

「がまし」形容詞は、そのような、心情的要素を加える語であつた。それが、『落窪物語』においては、強い批判という、一つの要素に留まっていたのに対して、『源氏物語』においては、様々な心情的要素が付け加えられていく。そして、その心情的要素は総じて否定的内容を持つものと考えたい。ただし、否定的と言っても、上接語に否定的な評価を加えるという意味ではなく、前述のような様々な陰の感情、晴れやかな喜ばしいものではなく、どちらかと言えば負の感情に分類できるものが感じられるのである。

『落窪物語』では、単に「がまし」形容詞が、相手を強く批判する語として使うのに留まっていたが、『源氏物語』では、その語を様々な場面で用いることで含有する意味を変化させていく。『落窪物語』で見た一様の意味ではない、新たな意味を、「がまし」形容詞を用いることによってそこに付与していく。「がまし」形容詞が担う表現の幅を広げていったのが、『源氏物語』ではなかったかと思われるのである。

そして、「をこ」「しれ」「すき」等のような人物に対する判断や評価を表す語とは異なる、行為や状況を描写するだけであつた「わざと」のような語にまで「がまし」を接続させる。本来であれば、主観的な要素をほとんど持たない「わざと」に、「がまし」を付けて形容詞化することに

よって、主観的判断を加える語と変化させ、その結果、心情的要素を盛り込んでいくのである。

『源氏物語』が批判の「がまし」形容詞で行った様々な意味の拡がりを、新たな言葉で行ったこの「わざとがまし」は、まさに『源氏物語』で生まれてきた表現だったと言えよう。

五、おわりに

これまで、『源氏物語』における「がまし」形容詞は、しばしば「をこがまし」が注目されてきたが、「わざとがまし」にこそ、『源氏物語』の「がまし」形容詞の特性がよく表れているのではないだろうか。

「がまし」形容詞は、接尾語「がまし」を用いて比喩表現の形を取りながら形容詞化することで生まれた主観的表現である。その主観的表現は、心情的要素を含む。言い換えれば、その主観的表現を用いることによって、そこに心情的要素を読者に読み取らせる余地が生まれるのである。

このような「がまし」形容詞を、『源氏物語』作者は好んで選択した。そして、人物の評価のみならず、事態や状況を説明するにあたり、新しい「がまし」形容詞を用いることによって、作中人物または語り手の捉えた事態、彼らの意識・心情が反映された事態の表現を試みた。それが、

『源氏物語』における「がまし」形容詞であつたと言えるだろう。

「がまし」形容詞をはじめ、接頭語や接尾語を持つ形容詞は、『源氏物語』の中でそれ以前の作品に比べてはるかに多く用いられる。『源氏物語』においては、既存の語を用いながら、接頭語、接尾語を加え、それを少し変化させることによって、様々なニュアンスが付加された形容詞が生み出され、物語の中で効果的に用いられてきた。

今後さらなる調査が必要であるが、『源氏物語』における形容詞、形容動詞の発達には、『源氏物語』作者の物事に対する主観的な把握を重視する姿勢が大きく関与していると思われる。『源氏物語』の作者は事態をどのように捉えどのように把握するのか、その把握の仕方は、作者の選んだ言葉からも明らかにしていくことができるのではないだろうか。

注

- (1) 『国語国文』第八四巻 第五号 二〇一五年五月
- (2) 本稿第二章は注1で示した前稿の要約である。用例調査に用いた索引類や、作品の成立年代など、詳細については、前稿を参照してほしい。
- (3) 『落窪物語』の引用は、三谷栄一・三谷邦明・稲賀敬一校注・訳『新編日本古典文学全集 落窪物語 堤中納言物語』

(小学館 二〇〇〇年) による。本文末に巻数とページ数を記す。

- (4) 『源氏物語』の引用は、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注『新編日本古典文学全集 源氏物語①⑥』(小学館 一九九四～一九九八) による。本文末に巻名と新編全集の巻数とページ数を記す。

- (5) 「わざとがまし」については、岡本美和子『源氏物語』にみる「をがまし」ー接尾語「がまし」を中心に(『国際人間学フォーラム』第7号 二〇一一年三月) の中で、接尾語「がまし」が付く否定的な意味になるかという観点から、全用例が考察されている。

- (6) 玉上琢彌『源氏物語評釈』第四巻 角川書店 昭和四十年 二一頁

- (7) なお、贈り物をするときの「わざとがまし」は、もう一例見られ、それは臘月夜の出家時に源氏が出家用の調度品を贈るところで用いられている。「いと忍びて、わざとがましくいそがせたまひけり」(『若菜下』四二二六五) と記されており、これも、熱心に贈り物の準備がなされながら、表だって晴れやかに行われるものとしては、「わざとがまし」は使われていないのである。

- (8) 石川徹『平安文学語意考証(其一)ーをがまし・さるは・ものはー』『平安文学研究』第十七輯 一九五五年六月 二二頁

- (9) 村田菜穂子「形容詞化接尾辞ーガハシ・ガマシについてー」『甲南女子大学大学院論叢』一三三号 一九九一年三月 四一頁

- (10) 勝田耕起「接尾辞ガマシの意味とその変化」『文藝研究』

第一四五集 一九九八年三月 一一九頁

(11) 注5の論文に同じ。一九一頁

(12) 前稿でも「がまし」形容詞が一種の比喩表現であること自体は指摘している。

(13) 『国語国文』第四六巻第五号 一九七七年五月

(14) 「がまし」形容詞が觀察的立場に主観性の加わった表現であることの指摘は、例えば、注10の論文に見られる。また、注5の岡本氏の論文では、「わざとがまし」を例に、「傍から見て意識的な評価を表す語になる」と説明する。

(15) 注8の論文に同じ。二五頁。「をこがまし」が「莫迦らしい」「莫迦くしい」でなくて、「いい道化者」「いい物笑ひ」になるやうな「不恰好」「不体裁」「チグハグサ」を、見つともない恥づかしいとする、さうした気持の言葉である事が、もう十分に判つていたゞけたと思ふ。」とある。

付記

本稿は平成二七年七月四日に行われた平成二七年度上智大学国文学会夏季大会での口頭発表をもとにさらに加筆したものです。